

ゆとり

「ゆとり教育」と呼ばれて何年たつことでしょう。今再び教育水準の低下が言われ、ゆとり教育も見直されているようです。詰め込み教育の反省から、ゆとり教育は誤りではなかったのでしょうか。方向が違つていたのかもしません。しかし今ゆとり教育が実践されたのにもかかわらずゆとりある方向に私たちは向かつていつたでしょうか。それどころかギスギスしたこと前、知らせないのはそちらが悪い、情報公開当たり前になっています。ところが自分のことはプライバシーと称して「知られない」のが当たり前、漏れたりしたら侵害されると大騒ぎ、権利、保証はとなつてしまします。極端に言えば「他人のことは何でも知る権利」、「自分のことは知られない権利」となつてしまします。これでは大局的に見る余裕がなくなり、自分の思い通りにいかないのは他の責任になつてしまします。又、うまくいかない理由を他に求めます。その理由が見つかるまで、私たちは安心できないのです。その理由がどんなに理不尽であつても探し続けるのです。どうもゆとりとか、余裕とか、のんびりとは遠いところにいるようですね。

時間がないのも今の日本の特徴でしようか。いや時間があつても時間がない生き方をしているのです。無理にスケジュールを詰め込み隙間の時間をなくしてしまい、それでなければ安心ができなくなるような生き方です。便利さは本来私たちに時間と余裕を与えてくれるものですが、その余つた時間を何に使つているのでしょうか。お寺の月参り等も、日時がきつちりしているのです。前なら一日中、月一回ということで待つていただいたものでした。それは待つ方ばかりでなく行く側もあくせくしているのでしょうか。お互いが、全くゆとりが感じられません。それは自分も同じ過ちを犯しうる人間という自覚がなければ苦情にならないことだと思います。この心は他に対する気持ちと言うよりも自分に対する敵しさがなければならないことだと思います。塾の時間、テレビを見る時間、勉強する時間、時間を忘れて体中を使つて遊ぶことがなくなっています。テレビゲームでは時間を忘れますが・・・

も時間に縛られています。仏教に「柔軟心」という言葉があります。他に対しても、どんな状況に陥つても忘れてはいけばなりません。他の過ちを咎めず笑つて見ていくれる余裕がななりません。良寛さんも一休さんもその優しさに秘められた自己に対する敵しさを感じるのです。もちろん宗祖親鸞聖人にもどんな過ちを犯してもそつと寄り添つて下さる暖かさを感じるのです。

そのことが、ゆとりとか、懐の大きさを思うのです。自分のみを正当化するところからは決してこのようなことにはなりません。今、東北の被災者に寄り添うとは、どれだけ自分に厳しくなれるかが問われている言葉なのです。

口で言うのは簡単ですが寄り添うということが、どれだけ大変なことか・・・